『経営に役立つヒント』

令和五年三月一日　第二百三十八号

昨年二月二十四日に、突然ロシアはウクライナを軍事侵攻しました。両国で二十万人を超える死傷者を出し、ウクライナは民間人の犠牲者やインフラの破壊に遭っています。一年が経過しても、解決の糸口は見えず膠着状態が続いています。

ロシアは、ネオナチズムと戦うために侵攻を止めないといい、ウクライナは祖国防衛を最優先に、九割を超す支持をゼレンスキー大統領に寄せています。

ロシアにはロシアの言い分があり、ウクライナにはウクライナの言い分があります。短期間で決着が付くとの予想は大きく外れ、二十世紀型の軍事大国が、かつての戦い方が通じなくなっていることを示しています。

日本人として重要なことは、この軍事大国ロシアを、どう評価・判断し、どう対処すべきか真剣に考えることにあります。

現に、日本固有の領土である北方四島は、終戦後ロシアに不当占拠されたままです。取り戻すには、戦いも厭わない覚悟が必要です。

更に、中国共産党が、台湾を軍事侵攻する可能性が非常に高い事です。習近平は、ラストエンペラーと呼ばれ、誰も彼に諫言する事が許されない絶対権力を持っています。法治主義でない、人治主義の非常に危険な人物です。

日本は、戦後アメリカのＧＨＱ（ＷＧＩＰ）の洗脳から抜け切れず、戦後利得者である共産党や左翼の教育者・インテリあるいは朝日新聞やＮＨＫ等のマスコミにより、アメリカから与えられた「平和憲法」を守りさえすれば、外国の軍隊が攻めて来ることはない。外交で話し合えば問題は解決すると言い続けて来ました。

しかし、ロシアによるウクライナ軍事侵攻という現実を見せつけられ、いかに軽薄な、現実的でない妄想であったかを、はっきりと思い知らされました。

では、日本は、どうすることもできないのでしょうか。

安岡正篤師は、「萬燈行」の中で、次のように述べておられます。

我々が何もしなければ、誰がどうしてくれましょうか。
我々が何とかするほか無いのです。
我々は日本を易えることが出来ます。
暗黒を嘆くより、一燈を付けましょう。
我々は先ず我々の周囲の暗を照らす一燈になりましょう。
互いに真剣にこの世直し行を励もうではありませんか。

我々中小企業の社長は、自社の社員の生活を守ることは当然ですが、日本の存続を念頭に、日々の仕事に取り組んで参りましょう。

日常の業務は、普段と何等変わりませんが、「一旦、緩急あれば義勇公に奉じ」という心構えだけは、社員の皆さんと共有し、明るく元気に生きて参りましょう。

自由主義と民主主義と法治主義と、日本を守る為に。

今月のポイント

祖国日本を支えるのは
我々、中小企業の社長だ!!